

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して(二八五)

文出水 康生

戦国おもしろ百話

三好・織田・豊臣・徳川時代に生きる横田内膳正村詮
— 阿波岩倉和泉岸和田近江水口駿河駿府伯耆米子への変転(十三) —

近江を制するものは
天下を制す

近江は琵琶湖の呼称から生れ、その水運と東海道・東山(中山)道・北陸道の陸運の交通の要地で京畿の経済を支えた。比叡山延暦寺・三井園城寺・日吉神社などの京都を守護する寺社が配置された。源平合戦の先駆の信濃からの木曾義仲軍が北陸道、鎌倉から源義経軍、承久の変の時の鎌倉軍が東海道・東山道から西上しての上洛に近江が要地となった。近江源氏の佐々木(六角氏)氏が江南、京極氏が江北に守護として位置



安土城の大手の石段



安土城の五層七階の大手守礎石



佐々木氏を発祠する四つ目紋の沙々貴神社



八幡山城から安土城、観音寺城を眺む



八幡山城下の洞覚院を基点とする中村一氏由縁の孫平次町



近江商人の故郷の近江八幡の案内板

した。今川義元の上洛を桶狭間で阻止した織田信長が尾張から美濃に進出し、中国の周の文王の故事を澤彦宗恩・策彦周良に教示されて井口を岐阜と改称して「天下布武」の旗幟・印章を掲げた。戦国天下人の三好長慶を中心とした三好氏の天下支配を武力によって駆逐する「天下布武」を近江を支配することで実現した。その拠点を三好長慶の芥川山城(高槻市)に京都を中心に対称点の安土城(近江八幡市安土町)とした。その安土城は四〇〇年来に佐々木氏が拠点とした観音寺城を築城した織山(四三三米)

から峰続きで琵琶湖に臨む安土山(九二米)に築城された。信長の安土城が本能寺の変で焼滅した。信長の後継者となった羽柴秀吉が大坂城を築城する。秀吉が対抗者の柴田勝家を賤ヶ岳合戦で破り、信長が実行途中であつた根来・雑賀の紀州攻め、四国平定戦を天正十三(一五八五)年に完了させ、五月八日に中村一氏を水口六万石に封じ、閏八月三日に三好康長の養子として三好孫七郎信吉となつていたのを羽柴孫七郎秀次と名乗りを変えて近江八幡(二〇万石)に封じた。秀次が八幡(鶴翼)山(二六三米)に天正十三

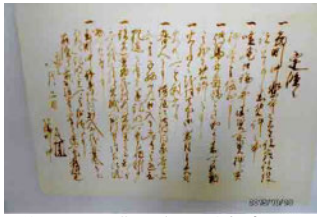
年秋から二年余で八幡山城が築城され、その城下町が形成された。その八幡山城趾のロープウェイ展望台から観音寺城、安土城趾が眺望される。安土町が近江八幡市に併合されている。その地に佐々木氏を祭祠する沙々貴神社が崇拝されている。秀次が中村氏、堀尾吉晴・山内一豊・柳直末・田中吉政の五人の宿老領二万石と合わせて四万石の近江国主となった。秀次が田中吉政を中心とする宿老の合力で八幡山城を年ほどで築城した。その時が四国平定国分けて阿波国主となつた蜂須賀家政が近江穴太衆の石工の技術で阿波の青石を石垣として築城した徳島城と全く同時期であつた。徳島城は細川頼之絶海中津が中国の渭水の風景に類似すると名付けた渭津の渭山に平山城として築城された。「天下」を支配した細川三好氏の守護所三好館が置かれた勝瑞から政治経済の中心が徳島城下に移る。

秀次の築城した八幡山城城下町に象徴的なのは現在に残される八幡堀の掘削である。城下町は葦原の低湿地に内堀として掘られた八幡堀の土砂で埋立てられ、延70万人の大海戦術で形成された。宿老の中村一氏も領地の水口の領民を動員して工事に参加したとされ、秀次の娘の玉姫を供養する洞覚院を起点とする孫平次町がその名残として存在する。秀次が十八歳にして八幡山城主となつた天正十三年から十八年の五年間は九州平定、聚楽第の造営、後陽成天皇行幸を秀吉が実現させて「天下様」と自任する得意の時代であつた。秀吉が関白から太政大臣となり、秀次が右近衛少将から中将、従三位権中納言に昇叙し、従二位として清華家の家格に列する破格を秀吉が実現した。京畿を「天下」としたのが日本全国を天下と拡大されて天正十八(一五九〇)年の北條攻めで天下(全国)統一とされることになる。その三月に秀次が大将として出陣して秀次の宿老勢も参加して緒戦の山中城攻めを取行して落城させた。その時の中村一氏の奮戦ぶりが記録され、一柳直末が先鋒で突撃して、流れ弾で三十八才で戦死し、秀吉に「関八洲にも代えがたい男を失った」と涙を流させた

言う。中村一氏の軍勢に横田村詮が加わったか否かは不詳であるが、水口域の留守居として治政に努めたであろうと推測される。北條攻めが北條氏政・氏直の自刃・降伏で決着し、徳川家康が天正十八年八月二日に北條氏の支配した関八州に転封、江戸城に入城する。家康の領地の三河・駿江・遠江が没収され、秀次の宿老であった中村一氏が家康の本拠であった駿河駿府城、山内一豊が掛川城、堀尾吉晴が浜松城、吉田吉政が三河岡崎城に入つて独立した大名となり、家康の西上を抑えることになった。中村一氏は駿府城の十七万五千石を領有して、近江から遠江に移封される。中村一氏の駿河駿府城での独立重用は筆頭家老の横田村詮の才能を必要として駿河での治政に大活躍した。

近江商人三万良し

豊臣秀次が北条攻め決着の後に尾張清須一〇〇万石に移封



織田信長・豊臣秀次・京極高次に継承された楽市楽座令



八幡堀の本町橋跡碑

川の日野川の河畔に、天正十四年の湖水で遡保郷と桐原郷の間で流血の騒動となったが、秀次は田中吉政と共に直接に言い分を聞いているの調停を実行

され、八幡山城に京極高次が封ぜられた。秀次の八幡山城城下町の形成には焼滅した信長の安土城下の町衆を移住させて町名に名残を残している。秀次が内堀としての八幡堀を掘削して琵琶湖と結び、その水運を城下に導入した。八幡堀の総延長は六キロメートルに及び、八幡城下に楽市楽座令が施行された。楽市楽座の慣行は佐々木氏

（六角氏の観音寺城城下の石寺で行われており、それを信長が安土城下町に施行し、さらに八幡山城下に秀次が十三条の掟として布令し、秀次が清須に移転された後に京極高次によって同様の楽市楽座令が施行され、高次が津城に移封されて八幡山城が廢城とされた後も八幡山城下町が近江商人の根拠の1つとなって多くの有名な商人を輩出して、重要伝統建築群の街並として現存して特異な観光地となっている。

秀次は殺生閻白の悪名を残しているが近江八幡山城下に銅像が建立され、天井

した。その報恩として秀次像と三人の庄屋の水争い裁きの像が建立されている。近江八幡市では現在も秀次への城下町形成への感謝がされている。

琵琶湖の水運と結接しての近江商人と吉野川の水運阿紀の海運と結接しての阿波藍商人が近世・近代に独自の活動を互いに互恵の関係を樹立していた。近江商人に佐々木・浅井織田氏らの遺臣がなつて慶

長期から松前に進出し、東国に「天秤商い」で商売する。近江の蚊帳を天秤で担いで出て行き、その先々の物産と交易して活動する「のこぎり商い」で繁盛した。松前での鯨魚の干鯨が西廻り航路で大坂・撫養に運送され、それが吉野川平野の阿波藍作に大量に金肥として利用された。近江商人藤野氏の寄進した鳴門の岡崎妙見宮の大鳥居として厳然と立っている。近江商人が近江八幡・日野・五箇荘に本店を置いて各地の支店を統轄したと同様に阿波藍商人も阿波に本店を置いて各地に売場

株を設定しての株仲間で共調して共存共栄を図った。藩権力とも共生関係を形成しての「阿波の藍か、藍の阿波か」の全国展開をした。さて、熊本大地震の直前の三月下旬に熊本・鹿児島にこの稿の依頼の中村郁夫、勝さんの招待で旅して、新知見

を与えられたと同時に、本来にはライフワークと誓っていた阿波藍流史研究のことを思い出し、吉野川口の宮島・鴨島の鈴屋小左王門（坂東家を中心とした薩摩・大隅・日向・肥後・天草の跡を熊本城下の本妙寺の本堂前の高灯笼に偲んだ。この高灯笼が、前震では無事であったが、二日後の本震で倒壊したことを、前震の直後によく連絡がとられて、まあまあ無事とのことであ

安心してその後には無音であったところ、勝さんからの久しぶりの電話で本震で大変とあったとのことでびびりぎょうてんと。そして近江蚊帳を染めた阿波藍の流通が近江八幡城下町の紺屋町の名で名残を残している。大文字屋西川利右衛門・扇屋伴庄右衛門住宅などが近江商人の豪勢な過去を象徴して公開されている。

近江商人は各地への展開を統括するために「家訓」を制定して徹底させた。阿波藍商人も同様に藍屋与吉郎（二本家）の「天半藍色」に代表されるように家訓を定めた。

近江商人が称賛されたのは「三万良し」の理念で商売したこととされる。「売手良し・買手良し・世間良し」の三万互恵共生・共栄・共存の商売を実行したからとされる。「近江泥棒伊勢乞食」と妬まれての呼称があ

るように近江屋・伊勢屋が江戸に「犬の糞」と同様に多かったとされるが、近江商人全体の「三万良し」の商売理念とそれぞれの家訓には現在も学ぶべきものが多々である。近江八幡山城と徳島城が同時期に異質の城として築城されたが、四〇〇余年後の今に、近江商人と阿波藍商人の存在を偲ばせる。生々流転の時の流れを実感する。



琵琶湖の水運に連結する八幡堀の船着場